

最終号の紙面

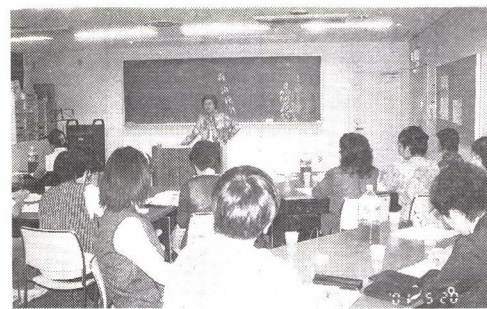
1面	家族社からのあいさつ
2面	読者・執筆者から
3面	月刊家族に贈るコトバ
4面	華麗なるかな60歳 9
5面	帰ってきた！ わし、教員だわ 33
6面	あえて「私はフェミニスト」宣言 52
7面	短歌エッセー 44
8面	河野美代子の更年期ダイアリー 112
	いい病院はどこに在る 8
	ジェンダーでみるアート散歩 48
	田端かやの韓国女性レポート 105
	ツガイとフェミ 20
	公共空間とジェンダー 15

# 月刊家族

第 227 号  
 発行所 〒730-0001  
 広島市中区白島北町16-25  
 TEL (082) 211-0266  
 FAX (082) 211-1761  
 E-mail kazokusha@enjoy.ne.jp  
**家族社**  
 (代表者 中村 隆子)  
 発行日 2005年1月1日発行  
 (毎月1日発行)  
 定 価 1部 300円 (送料別)  
 年 間 購読料 4,320円 (送料含む)  
 郵便振替口座 01390-5-25205



▲ボックス家族エソール広島に移転 (1998年)



▲ひろしま女性学講座開講 (2000年)

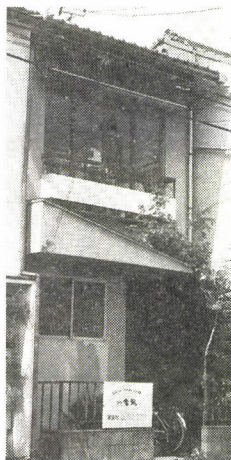


▲「女・核・平和」シンポジウム開催 (2000年)

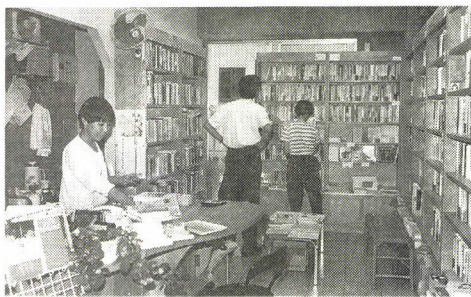


▲月刊家族200号記念 (2002年)

「山代巴」出版記念会 (2004年)▶



▲旧社屋 (1985年)



▲新社屋と1階ボックス家族 (1990年)



▲月刊家族5周年記念会 (1991年)



▲月刊家族10周年記念会 (1995年)

これまででも、そしてこれからも  
 わたしが生き延びるためにーフェミニズム。

## 月刊家族終刊にあたって

年末テレビで子ども番組をみていたら、幼稚園でのインタビューがあった。アナウンサーが聞いていた。「サンタクロースはよい子に贈り物を配りおわたったあとは、何をしたらでしょう」

子どもたちの答えは「ああ疲れた、といつて長靴はいたまま、2階に上がって寝る」「トナカイに少しえさをやる」「クリスマスが終ったのに明るくしてるのはムダだから、街中のイルミネーションを消して回る」

なるほど、なるほど。ひと仕事すんだら、一服とあと片づけが大切なのだ。

月刊家族も、ここらで終刊するけれど、さて、2階に上がって寝ることにする、なんてわけにはいかない。だいたいサンタのようによい子に贈り物配ったか? 「よい子」というより、良妻賢母でもなく、主婦としてはおさまりのわるい「フェミニスト」たちが、寄り集まって、20世紀から21世紀に峠越えをしただけのことだった。互いにオンブもダッコもせず巡礼の如く確かな足で。自立というのは、とても身軽な生き方だ。天女になって舞い遊ぶことが出来る。

「遊びをせんとや生まれけん」は人間の真理かもしれない。歌ったり、創ったり、語ったり、描いたりつまり自己表現のすべてがアートという遊びなのだ。生きとし生けるものの権利なのに、女は「家事・育児をするため」に生まれ、苦勞と不幸に耐えるのが「美德」だった。

それはきつと、表現のメディアを、男性が支配してきたからではあるまいか。

メディアは世界人類の共有物のはずなのに、いつも富める者、力の強い者が独占してきた。強い者の前でモノが言えないのは、自分が自分自身のメディアをもっていないからだ。「虎の威を借りる狐」にはなるまい。

ほんとうのフェミニズムのために、私たちは、私たちのメディアを創りつつげよう。この遊びにゲームセットはない。

家族社主宰 中村隆子  
 スタッフ一同



# 読者・執筆者から

## 『情報の横つなぎと時間つなぎ』

有元伸子さん

### ●「ひろしま」ジェンダーが私のテーマに

私が初めて家族社と月刊家族に出会ったのは、中国新聞の案内記事を見て受講した、2000年春から夏にかけての「ひろしま女性学講座」だった。講座では、加納学ともいいたくなるような講師の加納実紀代さんの在野ならでの学識・見識の高さと人柄の温かさに惹かれるとともに、家族社の柔軟な講座運営も楽しんだ。

その後、この指とまれ、の募集に誘われて、加納さん・上野千鶴子さんたちを招いてのシンポジウムの運営にたずさわり、家族社と高雄さんの行動力や蓄積に興味を感じて、月刊家族の購読を始めた。

だから私は、19年の歴史をもつという月刊家族の、ほんの4分の1ほどしか知らない最近の読者だ。けれど「おすすめの一冊」のコーナーを何度か書かせてもらったり、大学・短大女性学担当者の座談会に呼んでもらったりしているうちに、まるで自分にいちばん近い新聞のように感じました。

「映画『鏡の女たち』どう思う?」「女性学を教えていて気になることない?」：高雄さんからのメールや電話で、映画を観て考えたり、初めて出会う人たちと打ち解けて意見交換する。いろんな人をひっぱりこんで、ファミリーの一員みたいな気分させてしまう「高雄マジック」にかかってしまったのだ。

読者としても、年度ごとに執筆者が替わる巻頭エッセーはじめ、河野美代子さんや岡崎まさるさんなどの連載記事が満載された紙面からさまざまな刺激をもらってきた。とくに、DVや介護、ジェンダー批評などを扱った特集記事や座談会には学ぶことが多い。『ひろしま』とジェンダーの関わりが私自身にとってのテーマの1つになったのは、家族社と月刊家族に出会ったからだと言言できる。

私にとって月刊家族は、私自身も住まわっている広島から、地域とグローバル両面の視野にたつてジェンダーやセクシュアリティを考えるために、月に一度、方向づけをしてくれる羅針盤のような存在だった。

最近の読者ではあっても、終刊はとて淋しい。でも、活字のミニコミ紙としての月刊家族は終刊しても、家族社の出版活動は継続することだし、高雄さんたちが培ってきたネットワークを駆使して繰り出す企画も今後も健在だろう。また、ホームページも発信の場としてもっと活用できるだろう。新しい家族社の活動を期待しています。またどこかで出会えると期待して。

版活動は継続することだし、高雄さんたちが培ってきたネットワークを駆使して繰り出す企画も今後も健在だろう。また、ホームページも発信の場としてもっと活用できるだろう。新しい家族社の活動を期待しています。またどこかで出会えると期待して。

相原由美さん

### ●時にはたじたじとなりながら...

月刊家族との出会いがいつだったのか今となっては定かではなく、ごく初期からの読者だったと思います。そして月刊家族を読むきっかけになったのは、中村隆子さんの出勤姿の記憶でした。

70年代、その頃中村さんが住んでおられた団地のバス停で、出勤の姿をよく見かけました。朝の少し遅い時間、シヨルターバッグを肩に長身にシヨルトカットの髪型、パンツ姿の颯爽とした様子を思い出します。それから何年かして、退職なさり家族社をはじめられたと聞いたのです。

近年の私の愛読記事は、河野美代子さんの「更年期ダイアリー」、そして森本直美さんの「青くふるえて夜は明けてゆく」でした。河野先生にはふた昔前にお世話になったことがあり、身近で見聞きした先生の口調が、年月を経てそのまま文章から立ち上がってくることに引き込まれてしまうのです。

森本さんは、私も短歌を詠むという同じ場所を持つ者として、仕事の現場からの作品を尊敬と感動をもって読んできました。タブロイド判8ページの紙面からどんなにたくさん刺戟を受けたことでしょうか。思い出すのは毎号の特集「家族として日本を抱えるさまざまな問題」にライトをあてて、読み応えのあるものでした。時には、たじたじとなる記事もありましたが、それも大きな刺戟で、自分でも本心に熱心な読者だったと思えます。

ひとつ残念に思うのは、自分が熱心な読者であっただけで、何も発信しなかったことです。月刊家族の親衛隊のつもりで、ただ楽しませていただき、学ばせていただいたのですが、終刊と聞くと、もっとスタッフの方たちに近づけばよかったなと反省もします。

20年近い年月には、中村さんの病いという大きなことを抱えながらのご奮闘だったこと、それを思うとお疲れさまでしたと心から申し上げます。また何か違う形でのご出版があるのではないかと期待しております。

29人から (アイウエオ順)

## 『色気のあるメロディア』

# 月刊家族に贈るコトバ

たと心から申し上げます。また何か違う形でのご出版があるのではないかと期待しております。

池田久美子さん

### ●いざとなれば相談のつてくれる仲間

「終刊との活字が目飛び込み、驚きよりも涙がこぼれそうな寂しさを感じました。本当にありがとうございました。とても残念です。

結婚し数年しかたない私に「食わせてやっているんだから俺が家族の船頭だ」と夫に言われ、舅からは「従順な嫁であれ」と呼び捨てにされてきたとき、私はしつかりと反論しながらも、内心は不安で心細い日々でした。そんなときに月刊家族の刊の記事を新聞で知りました。

当時は横浜在住。その後、夫の転勤に伴い茨城・苫小牧と移動しながらも読み続けてこられたのは、毎月確実に送られてきたからです。一度だけ「購読料が惜しく感じられ、やめようかと考えていたとき、編集室欄に「皆様も大変でしょう」とあり、購読料を振り込んだのが忘れられません。

中村さん・高雄さん、家族社の皆様、お会いしたこともお話しする機会もありませんでしたが、勝手に「いざとなれば相談のつてくれる先輩い仲間」と思っていました。

時の流れはありがたいもので、女である自分に縛られることが少なくなり、自分らしく生きられるようになったと感じます。社会が変化したのか、私の感覚が鈍くなったかは定かではありません。

出光真子さん

### ●連載をきっかけに一冊の本を出しました

お疲れ様でした！ 楽しみが1つなくなりました。悲しいです。私の毎日の生活で、共感する意見にそうそう出会うことはありません。月刊家族にはそれがたくさんありました。

例えば、「コート散歩」の「セザンヌ雑感」で、セザンヌがアドルト・チルドレンじゃなかったかという解釈。そして、それに続く彼のありようへの考察。私もずっとそう思っていました。

他にも、尊敬される有名作家たちに、同じようなケースがいくつかあるけど、彼らを神のように崇め奉る人々にはなかなか聞いてもらえません。最近号の「モノと女性たち」についても、男の制作者の作品をみると、背後で犠牲になった女たちのことを思ってしまう私は、意を強くしました。

また、北原さんが書いておられた「島田紳介を告発した女性」の話。がんばれ！ がんばれ！ と叫んでいる私の周りでは、世間の人たちは結構女性に批判的。すごい！ 偉い！ サポートしなくてはいけない」とおっしゃる北原さんに救われました。

考えさせられることもたくさんありました。「考える材料になる情報」を掲載したいという思いで始められた3人のスタッフの思いは、私にとって大成功でした。

私を「家族」の一員にしてくれたのは、1998年のお正月から2年半あまり。「軌跡そして仕事」というタイトルで自分の仕事と人生について書かせてもらったことです。うれしかった。選題を前にして、生きてきた方を振り返る機会が舞い込んできた！ そんな感じでした。写真掲載してくださったので、それを選ぶという作業を通して、言葉だけではない、イメージをもって心に届く「振り返り」をすることができました。連載したものに加筆し、映像作家の自伝として一冊の本にもなりました。声をかけてくださらなかつたら、書くことはまずなかつたでしょう。

高雄さんをはじめ、皆様、長い間お疲れ様でした。やめて欲しくない！ と叫びながら...

宇野淳子さん

### ●自分の個性を説明できる知恵をもらった

家族社の存在を知ったのは、月刊家族の創刊号が発行された直後だったと思う。そのころの私といえば、大学に入学生たばかりの娘と高校3年生の息子という2人のすねかじりを抱えた母子家庭の母親。果たさなければならぬ責任の大きさを改めて自覚し、抱えている荷物の重さに押しつぶされそうになりながら、それでも自分のやりたいことを始めるのは

今しかないという無謀かつ我儘な思いにかりたてられながら、周りの人たちに「なんでこんな不便なところで...」などとあきれられることにも慣れてきた頃、訪ねてくださった方が、家族社とはかなり深い縁を持っている方だったようだ。

女性起業家云々、もてはやされる昨今の状況とはまるで違つて、夫がいなくて、子どもがいるというだけで、融資の対象からはずされてしまう時代。廃屋にちかい田舎家を営業を目的とした家屋につくりかえながら、最高にお金のかかる時期の子どもをかかえて生きていた私にとつて、その購読料は高すぎた。どんなに興味があろうとも、続けて読んでみたくはないと思つても、今はペンキを買わなければ...、今いるものは釘と子どもたちの食料と学費、ここで何かを起すということ以外には自分のために使うお金は1円もないと決めて暮らす私にとつて、今にして思えば決して高い購読料ではない金額も、購読を断念する理由にしかならなかつた。

にもかかわらず、家族社の存在は決して私の頭のなかから消えることはなかつた。自分のもに届く月刊家族はなかつたけど、知人友人、誰かの元に送られてくるそれに目をとおす機会も多く、ただノウテンキに、「女であるが故にあきらめなければならぬなんて嫌だよ」と程度で、誰にも依存しない生き方を選んだ自分の個性を、すこし理づめに説明出来る知恵はここから学んだような気がする。

後ろめたい立ち読み読者を卒業し、時には恥ずかしながらの雑文を書かせていただいたりするご縁までの繋がり、一体なにゆえなのか答えが出るのはまだ先かもしれない。月刊家族を読みながら、培われてきた自分を抱えて生きていく人たちが、この世から消滅してしまわない限り家族社は生き続けているといえるだろう。ならば、この私との縁も必ず進化して何かの形となることを信じて。

終わるのではなく、次へのステップと思ひ、この段階の卒業に「おめでとう」を贈ります。

恩地いづみさん

### ●一歩前を照らす私の指針

月刊家族終刊、いつかは来るものだったのにショックでした。創刊号からずっと読んで、私の指針のような紙面でした。このままずっと、一歩前を照らしてくれつつあるものように







性を目指して、月刊家族に勇気づけられながら、結構長い付き合いをしています。いまだに、「福祉を商業にするな」とか、「中途半端に生きるな」とか、面白くないことはするな」と、お叱りをいただいています。という、そんなことは言っていないと言われると思いますが、そういうメッセージをいつも受けています。

適当な妥協と慣れで生活している私はいつもの、家族社集団の後ろから、「こそこそ」行っているのですが、「ここの見方があったのか」と目からうろこが常にあり、新しい発見があります。家族社が時代を先取りしているのではなく、そういう発想そのものに、時代が後からくっついていったという形容が正しいのではないかと思います。しかし、そんなことはともかく、家族社の周りにいるといつも愉快でした。笑える空間がありました。

お金がないのはいつものことらしく、それでも困っている様子は全然見られません。ビール飲んで酔っ払って笑っているような感じです。高橋さんは飲むと泣き出しますが、家族社の勝手はよさは自分たちが飽きるとそれまでしていたことがなくなることで、中村先生の作文教室も2、3回で、お酒を飲みながら話をしたり、エソールの店の上海グッツ販売(うちにシルクのスカートが3枚もあります)もいつの間にか終わったり、CRの研修もしましたがあれもすぐ終わりました。

つまり、これは、先日、中村先生と話してわかったのですが、「慣れで仕事をするのが一番いけない」ということでしょ。うが、私は、ただ単に飽きっぽいのではないかと思います。紙面では何度かネタにされましたが、それも、もう全然覚えていません。

ともあれ、保守的傾向の強い私が、「それでいいんだ」と励まされ、心の支えとしていた月刊家族がなくなることは言葉に言い表せませんが、もう自立せよとのメッセージだと思います。多分気まぐれな2人ですから、また、何かされるでしょうね。それを待っています。月刊家族の気まぐれに心から乾杯!

### 丹原恒則さん

#### ●問題意識を共有できる貴重な場

私が、この全国ミニコミ紙を初めて目にしたのは、東京都渋谷区初台の「女たちの映画祭」上映事務局と後に「月刊女性情報」となったパドワイメンズオフィスが同居したスペースに、当時「男も女も育児時間を連絡会」の活動メンバーだった私が、パンフレットを置かせてもらいに行ったときだったと記憶しています。もう20年近く前のことです。

それからは、生活圏であり通勤経路の途中にあつた表参道のクレヨンハウスの、全国の主だったミニコミ誌や市民・女性・男性グループの会報などが置いてある情報コーナーなどで見かけました。広島発なのに取りあげられているテーマに

は、地方色だけでなく全国性や国際性が感じられ、女性問題や家族問題というのかフェミニズム的な問題関心の質の高さを紙面から感じさせられ、読み応えのある月刊新聞として存在を強く印象づけられました。

数年後に老親問題などの解決を迫られていたので、東京から岡山へ転居するつもりがあった私には、お隣の県とはいえず、発行元である家族社は、中国地方を生きている場にしたときに問題意識が共有できそうな貴重な場であり、まだ男女共同参画センターがない時代でしたから、内心とても心強く心の拠り所の一つとして生涯忘れられません。

何人かの知人・友人・憧れの人たちが、続々と寄稿するようになり、私にも、その機会が訪れ、チャンスは高橋さんが与えてくださり、正確な詳しい投稿内容は今はそらんじていませんが、本名で地元の情報誌などには書けない題材に挑戦したいと思います。

実父からの私への体罰を伴う厳格な躰の日常風景の暮らしの中で、いつもハラハラドキドキで見ていた8歳年下の妹が心房粗動を中2の頃に発症して、一般の身体障害者になつた体験談。敵父への対応策として私が身につけた「醜いほどの自己正当化癖」や主観的な「暴力」というスピードのある愛。父からされてイヤだったことを身近で学習し、他者へしがちな広義の暴力の連鎖傾向が、特に娘に対して世代間連鎖が出がちであること。つい相手に良かれと勝手に幻想や過剰情報を押し付け、転ばぬ先の杖風に本人の意志を無視して先回り情報を伝え、相手を自分の思い通りにしようとしてしまうこと。つまり、相手をパワーコントロールしたが、父からされたことを娘に無意識にしよう癖について綴つたような気がします。

只今、親離れた「娘と父の(戦争)」休戦中。これまでの私の精神のリリースは、拙稿「道徳的な男性性構築の課題 福澤諭吉の(チグチグ)」(愛)(敬)「怒論」現代のエスプリ(第446号、至文堂、2004年9月)を是非ご覧ください。

### 珍部千鳥さん

#### ●深く広いフェミニズムに出会えた

突然の終刊予告に驚かされたつ、終わるということでの存在意義を気づかされるのでした。残念です、とても。しかし、社会事象や生活問題について鋭く問ひかける編集方針である以上、今この時点での終刊も一つの意思表示だと考えるならば納得です。

出身地富山から松江市に移り住んで22年。同じ中国地方である広島市はいわば大都会クラス。被爆地としての意味も含めてそこから発信される情報に、田舎者の私はときに瞬きすら難しい驚きがありました。そして今は、快い興奮に満たされる記事に魅せられる日々でした。河野美代子さん以外は未知なライターばかりでしたから。

私は確信できます。これまでに集われた紙上の人々は、そのまま表現の場を変えただけであつて、思想や行動様式は喪失されないということ。

時代はもはや女性を語らずして動くことはなくなり、また深く広いフェミニズムに触れることができ、その契機になつた紙面だつたのだと結論を下した私です。

再び出逢えるかもしれないと信じて最終号の紙面をみることになるでしょう。全国的に見れば小さなミニコミ紙。これまでのご苦労と奮闘ぶりに心から感謝いたします。お疲れ様でした。

### 天満優子さん

#### ●いつも特集は興味深く読みました

10年以上前に、ある女性フォーラムのレセプションの席で中村さんとお会いして以来ずっと愛読してきました。いつか通信を書こうと思いつきながら、とうとう最後となつたとは。皆さんのことを教えられました。ありがとうございました。

岡崎さんのエッセイは、茶化しながらも折々の教育問題の本質をついており、フェミニズムとは直結しないが明快で考えさせられることが多かったです。

### 鳥光美緒子さん

#### ●多様な人や活動を呼び込む培養器

話は20数年前のことになる。私がまだ、学生だった頃のことである。修士課程は修了したものの、博士課程に進学するめどはたまたま、ましてや就職の見込みもなかった。何かがあるはずという漠然とした期待と現実の研究課題との距離も莫大だった。その私にとって、当時、所属の教室以上に、よりどころとなつたのが、広島フェミニストライブラリーだつた。

略称HFL(Hiroshima feminist library)。名前は立派だが、実態はいえ、広島大学の旧千田キャンパスにほど近い、まったく日の光の射さない四畳間を拠点とし、フェミニズムに関する本の貸し借りと読書会を通じてのコミュニケーションを基本とする、ささやかなネットワークだつた。その母胎となつたのが「広島女大女子院生の会」。大学内の院生間の繋がりが、フェミニズムと女の視点を基盤に、キャンパスを超えたネットワークへと拡がっていったときの、あの高揚感は今も記憶に残る。

数年後、月刊家族が刊行された。当時のことはあまり記憶がないのは、多分、私が福岡にいたせいだろう。そして、広島に戻つた翌年、現在の社屋が完成。その後、10数年、家族社の店子として同社の3階に生活した。

理念によって駆動された活動とネットワークはそれ自体、周囲に多様な人や活動を呼び込む、一種の培養器のような働きをする。中村宅での研究会や夕食会、家族社なしではありえなかつた人々との出会いや交流など、家族社の周辺にいたことで、私は居ながらにしてその余録に預かつた。

月刊家族の紙面についていえば、なんといつてもその特徴は、毎月、地元と全国の、その双方の読者をつなぐ特集テーマを取り上げ、それにかかわる人々の生の声をインタビューや投稿の依頼をとおして活字にしていたことだろう。直接に企画取材にあたることのない人間の気楽さで、せつかく取り上げたテーマを、もっと取材で深めたいのと思つたことも何度かあつたが、多分、それは、新しいテーマを企画し続けることの重圧から解放された、今後の家族社にこそ期待すべきなのだと思う。

ともあれ、第一幕の幕引き。中村さん、高橋さん、お疲れ様でした。

### 野村幸代さん

#### ●異国にいる私の貴重な情報源

高橋さんとはじめてお会いしたのは、どこだつたか実はよくおぼえていない。広島で行われた日本在住のフィリピン女性たちのワークショップだつたかもしれない。そのときフィリピン女性たちは、日本にきた自分自身が、どこから来て今どこにいるのか、どこに行こうとしているのか、もう一度振り返り見直し今とこれからを見据えようとしていた。そんな自分探しのワークショップだつたと記憶している。

大学を卒業して留学を決め、「開発とは何か、女性とは何か」と漠然とした課題を抱いて、私は、彼女たちとは逆にフィリピンに行つた。行き先は逆だつたが、これも自分探しの旅だつた。高橋さんに言われて月刊家族に書くようになったのは、フィリピンに住み始めて2年経つたころだつたと思う。ちょうどフィリピン生活に慣れ、一人で自由に動き出せるようになった時期だつた。国が変われば「女らしさ」も違う。24年間が身に刷り込まれた日本的感覚でフィリピンを見るときの様々な気付きが、自分の中にあふれそうになつていったのを、高橋さんは「書いて」と言ってくれたのだから、書くのはとても楽しかつた。

始めたころ、小学校時代の恩師から連絡があつて、実は彼女も読者だと知り、家族社のネットワークの広さに驚いたこともあつた。

書き始めたころは自由で気ままな学生だつたのが、私も世の流れにそつて、結婚もして子どもも持つて家族をつくるようになった。フェミニズムで「すべての異性愛(結婚だつたかな?)」は一度は絶望すべきと習つたはずだつたのに、自分がいよいよ「家族」をつくるまでは、その意味がわかつてなかつた。今の世の中の女の生きがたさは、紙面に書かなくなつた今、頭で知っているだけでなく体感するようになった。

フェミニズムが言葉にしてきたものは、まだみんなの言葉になつてないと思う。だから、まだまだ言葉にしていけないといけないと思う。その意味で月刊家族が19年間語り続けたのは本当に重たいと思うし、終刊は残念。言葉としてなかなか認められない言葉が発し続けるのは、時々しんどい。でも、自分の言葉をつむぎだして、届かなくても届いても、とにかく送り出していかなくちやちやと思う。言葉にしてはじめて、そこにそれは生まれるのだから。

### 西川祐子さん

#### ●無数の地方をつないで来た

紙媒体としての月刊家族終刊の知らせに、時代の転換が始まつていることをひしひしと感じています。暗転となるか、持続のための変身となるのかは、月刊家族という媒体を通して知り合つた私たち一人一人の今後次第。

広島を家族社を一度も訪問したことのない私ですが、京都の西には月刊家族がいて、つながっている、と長年思つてきました。1992、3年の1年間は、巻頭エッセイ「祐子フランス通信」を書きました。南フランスの小さな街、エックスIIアンIIプロバンスに住んでいた時です。連載には「フランス通信」という題をいただきましたが、私は今住んでいる京都から家族社の広島へ通信を送るような気持ちで、フランスから日本へ、ではなく、エックスからヒロシマへむけて連載を書いていました。首都パリや大東京経由ではなく、中央抜きで無数の地方と地方をつなげるのが、月刊家族のポリシーと理解したからです。

じつさい、中心と周縁という構造はあらゆる組織にあつて、中心は周縁を他者化する。運動の場合は、地方は中央の支部というわけ。そうなると、地方は地方というたつた一つの地方色しかもたなくされる。そうではなくて地方色あるいは個性は、具体的で多様、多彩ということを月刊家族の紙面が毎号の紙面で如実に伝えてきた。だから読んで飽きることがありませんでした。



ました。

時間つなぎという言葉は今、私のなかから出てきたばかりのことばなので、まだうまく使えませんが、月刊家族の紙面であれば、いくつもの連載がいつも魅力的であった。ゆうゆうとくつろぐところが良かったし、バックナンバーを捨てずに保存させる力がありました。読み直して、あれはこういうことだったんだ、と時間をおいて納得することもよくあった。世代間交流も、批判的継承がいていいに行われてきたと思います。

今、生き延びるためのフェミニズムの必要を改めて感じています。時代の転換期を次へむけて生き延びてこそ、見えるもの、解ることがある。必ずまた、お会いしましょうね。

### 西川牧子さん

#### ●始めるのは簡単だけど終わるのは難しい

とても残念です。この3年間は義父の介護のため田舎に住んでいるので、毎月月刊家族が届くのが楽しみでした。先日、やはり20年間、毎月一度は診てもらっていた耳鼻科の先生が高齢のため閉院されて淋しい思いをしたばかりだったのです。やはり物事は終わりがくるのかとしみじみ思いました。始めるのは簡単だけど終わるのは難しいことだと、私はつくづく感じています。河野美代子さん、岡崎勝さん、中村隆子さんの話がもう聞けないのかと思うと、本当に淋しいです。

誰かが、女性は50代からが楽しいと言っていたけど、私は全然。私の場合は人並みより遅れているから60代から楽しいのかなと期待しています。まあ、とにかく今までありがとうございました。また、お会いしましょうね。

### 西沢江美子さん

#### ●新しい家族への掘り出し物

月刊家族終刊のお知らせが突然のメール便で送られてきたとき、表現し難いショックを受けた。ただ単に1人の読者としてしかやってこなかった自分自身に対する、やり場のない怒りだ。ふりかえってみれば、広島市にできた小さな小さな「広島県婦人のための電話相談」を取材に行ったのが、家族社の代表者である中村隆子さんとの出会いであった。当時、女たちがこれまで歩んできた女たちとは違った生き方をしようと考え出せる時代をつくり出していた。だが、どこもどこもその先を探すには、情報がほとんどなかった。そんなとき「電話相談」は開設されたわけである。確か、1980年代に入ったばかりのことだと思っ

農村女性を取材し、むらの女性たちの自立をとともに考えてきた私にとって、「電話相談」のニュースは「これだ」と思ったのだ。悩みや喜びをぶつけ、まず明らかにして、1人の問題ではなく女性全体の問題にしていくこと。若かった私はそ

う感じ、広島市へ出かけた。

そこで出会った中村さん。新聞記者としても大先輩であることを知った。また、その人が全力で友人とともに「電話相談」を立ち上げていたこともわかった。新聞記者のあるべき姿をそこで教えられた。中村さんは一言も「新聞記者とは」とか「女性運動は」なんて肩肘張ったことは言わなかった。だが、相談所に寄せられた電話の向こう側にいる女性たちの状況を語ってくれたのである。「農村女性の声もぼつぼつあるのよ。新しいむら、家庭内民主化をどうするかよね」と言っただよなことを話してくれたのをよく覚えている。

そんなことがあつて2、3年して月刊家族は生まれた。どんなにこの新聞が、新しい家族、1人の人間としての家族づくりのあり方を模索するために掘り出し物となったことか。食卓も子どもも老親も、そしてわたしまでもが資本にからめとられ、その流れが大洪水にいく中で、月刊家族は別な視点を出しつづけたことか。

いま、家族殺し、親殺し事件のない日がない。そして、3万5千人の自殺者、二トとひと括りにされてしまった「働く」ことを奪われた若者たちの広がり。数え切れないほど生きる権利が失われている。その保障を明記している憲法の生存権さえ変えられようとしている。私の中に育っている月刊家族を大木にしていきたい。ありがとう、月刊家族。

### 仁ノ平尚子さん

#### ●月刊家族で人生が変わった!

皆さん、お久しぶりです!「新・田舎暮らし入門」を長らく連載していた山梨県の仁ノ平尚子(のひら・ひさこ)です。お久しぶり!ですが、これでさようなら!なんです。月刊家族で人生が変わった!私としては、寂しい限りです。東京で生まれ育った私が田舎暮らしようになったのが29歳の時。今、46歳ですから田舎暮らしもすでに17年になりました。連載は田舎暮らしになった私の驚き・悲しみ・怒り・不思議・ため息の繰り返しでした。田舎暮らしが苦しくて苦しくて取り乱すばかりの私でした。失敗した!と思

いましたね。なんでこんなところに住まなくちゃならないんだ!と後悔の日々でしたよ。田舎は女に「女」の烙印を押して行動を規制したり、役割を押し付けたり、貶めたりの毎日でした。その規範に見合った女かどうかを女がチェックする社会。違う!私は私!私を決めたい!と私は心のなかで叫び続ける苦しい毎日でした。

そこへ月刊家族からの原稿依頼。田舎のことを書いていって。私の苦しさを書いていって。私を苦しめていた田舎は私の観察対象となり、私は田舎を距離と少しの余裕を持って眺められるようになりました。連載は7年以上も続いたでしょうか。私は書くことで毎月毎月、田舎と格闘してい

くことになりました。

その訓練?と「田舎でも女に議席をよこせ」の思いが私を「県議会議員選挙立候補」に駆り立てることになります。そこでも、田舎の選挙の現実が私を苦しめますが、2度目の挑戦にして初当選!もうすぐ県議3年目を迎えます。議会の中ももちろん田舎で私はまた格闘していますが、議会という公式の場で「田舎」に取り組みるのはそれはそれで幸せなことでありました。

今、田舎は市町村合併の波の中で新しい自治体が誕生しその定員が少なくなった議員選挙では女たちが苦戦しています。今後、田舎の女性の政治参画をどう図りたいのか模索中です。行政主導の「男女共同参画」を学んだ田舎の女たちですが、相変わらず男性の自治会長の元、行事では炊き出しに追われています。そのことに疑問をもつ女はごく少数でも、その少数の出現がうれしい。

田舎はどこへ向かうのか? その中で女たちはどう生きていくのか? 私はどう生きていくのか?「田舎」は私の永遠のそして政治的テーマとなりました。読者、そしてスタッフの皆様、長い間ありがとうございました。

### 樋渡美和子さん

#### ●編集の姿勢に確かなものを感じた

今、振り返ってみると、月刊家族5号に私が何かで登場したのが購読の始まりでした。高雄さんの取材を受けて家族社の姿勢に確かなものを感じました。あれから19年間、ずっと女性の立場から、いろんな角度で問題を深く追求してこられ、まだまだ女性の代弁をしていたきたかったです。でも、一代では終刊もやむをえないことだ、これからはまた個々に問題意識を持ちつづけていきたいと思

月刊家族終了の案内を拝読し、とうとうその時が来たかと感慨深く思っています。実は私、7月からずっと入院していましたが、先日退院し、机の周りの山を掘り返して初めて知りました。7月初め、ちよつと過労がたたってノーストックで倒れ、いろいろ不自由な思いをしています。ただ軽症なのでご放念ください。それにしても中村さん、高雄さん、長い間ご苦勞様でした。月刊家族が読者と周囲の人々に与えた影響は本当に大きく深いものがあつたと思

私も大学の女性学/ジェンダー学のクラスや大学院生たちのテキスト、それに各地自治体の学習会などによく使われていたいただきました。ありがとうございました。

国内的にも国際的にも暗い、重苦しい出来事ばかりが続いた2004年でしたが、2005年には少し明るい希望の光がさすのを期待したいものです。

### ますのきよしさん

#### ●「ミニ」発行同志としてお疲れ様!

家族社の皆様、長い間、お疲れさまでした。ぼくも70年代から90年代にかけて月刊ミニ紙を発行していました。「交流」という名称でしたが、印刷物の宿命で、一方通行型にならざるをえない面もありました。

99年からは、インターネットによる双方向的コミュニケーションに興味を持ち、今では数個のメーリングリスト(自分が主宰するものも含め)に参加して、多角的な対話を楽しんでいます。無料な点も有難いです。

時代も大きく動いていますね。最近知り合った、某国立大学院で家族社会学を修める女性は「フェミニズムには興味がない」と言っていました。苦笑しながら、ぼくが、60年安保、全共闘、リブ、といった節目の流れを簡単に解説すると、目を丸くしてました。体験はほとんど継承されません。いつもゼ口からの再出発と考えましょう。

### 松本ぼのさん

#### ●一番苦しいときに支えになった

毎月ずっと、多分永遠に(?)配達されてくるだろう、くるものだと思っていた月刊家族。それが来年からはもう来ないのだと知ったのは、季節はずれの低気圧が通った、風の激しい夜でした。思えば19年間(なんと19年間!)「お疲れ様でした」と言わねばならぬのか、そんなノドイノかことばを探しています。

私は創刊号からの読者でありながら、一度も感想を送ったことのないフツドキ者でした。「投書をする」という形で「返信」は出さなかつたけれど、でも確かにあなたの方の言葉は私に届いていました。この19年間で一番苦しかった時期(それは母が病に倒れ亡くなるまでだったのですが)、支えになってくれたのは月刊家族の言葉たちなのです。

先月号の「人生の整理の仕方」を読んで、恥ずかしいです。私は何もしていませんから。でもたいしたものではありませんが、お金は使ってしまうつもりです。3分の1は自分のため、3分の2は周りの人々に。ボケ始めたら家を売って施設にと思っています。家族にはもう分け与えましたからね。夫の素晴らしい生き方をみてきて、「英知と人徳も一瞬のもの」というせりふを納得しています。ありがとうございました。

ンダー文化を通しての啓発は、多くの「女」たちに「語り」の場や元氣を与えてくださいました。私は、そのパワーをいただいたひとりでありますが、「いいかげんな中途解約読者だったなあ」と、終刊となった今では通読しておくんだと猛省しています。

### 米山きんさん

#### ●新しく生まれ変わったような気がします

長い間ありがとうございました。すごく刺激をいただいて、新しく生まれかわれたような錯覚もして、楽しいうございませした。私は戦中派です。びっしり詰まった思い出をかたに元氣です。労働者ですから思い出に浸かっているわけにはいきませんが、ここまで生かされてきたことへの感謝をもって、人生の最後を迎えます。

先月号の「人生の整理の仕方」を読んで、恥ずかしいです。私は何もしていませんから。でもたいしたものではありませんが、お金は使ってしまうつもりです。3分の1は自分のため、3分の2は周りの人々に。ボケ始めたら家を売って施設にと思っています。家族にはもう分け与えましたからね。夫の素晴らしい生き方をみてきて、「英知と人徳も一瞬のもの」というせりふを納得しています。ありがとうございました。

紙面からまた不死鳥の羽ばたきが聞こえてきたからです。すい!時代を見据えて、これまでとまた違った速度と新たなペンの技とで、次の時代へ向かって始動する家族社へ心よりエールを贈ります。

### 吉川満里子さん

#### ●広島「女」とは「活字」に編みこんで

この広島で「女」とは「活字」を編みこみ19年、ジェ

この広島で「女」とは「活字」を編みこみ19年、ジェ



未来の沃野を目指して

9

華麗なるかな 60歳

ウーマン・リブ を生きて今



舟本恵美

プロフィール

1941年生まれ。ウーマン・リブの思想に共鳴し、『炎』『女の思想』『女・エロス』などの発刊に関わる。参議院選挙に際し「政治を変えたい女たちの会」の立ち上げなど、女性運動にも関わり、2001年に定年退職。住居を伊豆・友だち村に移して、次なる活動を模索中。

月刊家族に書かせていただいたこの1年、あらためてリブの過去、現在、未来に思いを馳せることができた。この出会いの発端はどこにあったのだろう、と思っていたら、やはり素晴らしい「遭遇」を発見したのだ。『お気楽フェミニストは大忙し』(駒尺喜美&中村隆子)を再読したら、お二人が初めて出会ったのが、1970年11月14日、東京千駄ヶ谷区民会館で開かれた日本初のウーマン・リブ大集会であつたということに気づいた。なるほど、と思わず嬉しい叫び声をあげた。わたしも、この集會に参加していたのだ、と。

きつかけともなつた日である。中村さんからコラムのスペースの提供を受けたのは、会場では存上げる術もなかったが、あの集會の「場」になつていくことに遠く起因するのだろう、と思つている。『女・エロス』は17号まで10年続いたが、月刊家族は19年も続けたという。その大樹の育んだ花は風に乗り、広く散つていったことだろう。『森の大樹の葉ずれのように、私たちに問いかけ、囁きかけてやまない』と堀場清子さんが『青箱』について書いたように、月刊家族の大樹である。

フェミニズムという言葉を超えたところに何があるのだろうか。「感情を論理化」してゆく果てに何があるのだろうか。わたしは、フェミニズムは普遍化し、一般化したのだと熱意をこめて、そう思う。1991年、1970年の言葉は、わたしたちの日常の中で血肉化して来たし、普通のことばとなつて来た。本紙を見ても、それぞれのタイトルは負つていくけれど、文章や内容はとも理解しやすい。するりと心に入ってくる。霧や感情過多の帳を解るのではなく、明晰に写実し世界を切り取つている。これは新しい表現の磁場にわたしが立っているからではないだろうか。

もちろん現実には表現だけではなから、法律や政治や社会規範などの軋轢、特に右傾化してゆく日本や中世の宗教戦争のごとき大國の世界、いやいや年金の減少や増税まで、身に迫る問題は多い。それらすべてをシンシア・エンローのいう「フェミニスト的好奇心」の目で、自然にゆるぎなく見つめているのではないだろうか。ジェンダーということばの濾過なしに、

今回の教育改革を親の立場で見ると、また、どえりやおかしなことがある。まあ、親の立場についていても、親も色々だよね、でもまあ聞いてほしい。親が学校づくりに関わることでできるというけど、そう簡単に、かかわれるものじゃないですね。だって、まず、時間があるきやう？ 働いとる、忙しい親や、子どもや年寄りの世話で忙しい親もおるのに、学校なんか来て、あーたらこーたら会議や相談できるきやあ？

現代の教育改革の傾向と対策 (2)



人が多いがね。本当は、生活が大変で、学校に子どもをしつかり任せたいつちゆう人が参加せたいかんわ。子どもをお受験でなんとか、モノを言わないかんわ。

「わたし、教員だわ」

立場で考えてください。なんて人に言う前に、自分で考えてもらわないかんわ。自分の子どもが、しんどく、つらくなるのに、平気で「勉強する時間が増えていい」なんていうのはどうかしとるぞ。

あ、あ、そこで70年に戻らなければならぬのか。あえて、そう思うことが今問われているのかも。原典に戻つて、1970年の出会い、1991年の気負いを振り戻つて、1970年の出会い、ニズムと初めて出会つた。老いらくの恋とはこのこと、夢中になつてしまひ、日本で、広島でフェミニズムしたいと思いを募らせていたら『月刊家族』なるものが図書館にあつた。あつたあつた！ 広島に

「私はフェミニスト」

フェミニズムの火

次世代に手渡そう

「場」であつた

わたしがフェミニズムの成果を掠め取り、フェミニズムはもう役割を終えたなんていうたわごとが聞かえてきたり、女性センターの館長のほんどが男性というようないやがたり、オトコがオムツをかえてりや「平等してます」みたいな気持ち悪い時代に、月刊家族の再生は急務だよ、カツ！ と撤つてひとまずお別れしましょう。



# 短歌 エッセー 青くふるえて夜は明けゆく

森本直美  
ケアマネジャー

44

無造作に転がっていた日常を  
想っていた白き病室の窓

「Tさんは胃がんの手術をして命は取りとめたものの、食べられなくて中心栄養静脈となり、「家に帰りたい」という思いを持ちながら老人病院に転院を余儀なくされた。夫を亡くして頼りになる身寄りがないTさんを、ケアマネジャーの担当が外れたからといって、「では、さようなら」というわけにはいかない。

ケアマネジャーとしてTさんの思いに添えられなかったという悔いもあり、私はひと月に1回、日曜日に友人として病院に見舞いに行つた。やがてTさんは食欲が戻り、私に買い物をお願いするようになった。パーキンソン病の震える手で一生懸命書いたメモには、おしやぶり昆布5つ、饅頭10個、煎餅5袋と書かれていた。

## 秋雨の決意

この事情を話すと、M施設長さんが後見人になりこれからの世話をしてくれるという。Tさんには「病院はTさんの生活にとって生活の場ではないよ。M施設はユニットケアといって部屋も広いしね。でも家で暮らしたいというのならなんとでも手はずを整えるよ。これからのことをよく考えてね」と言った。



「またいつか」と塙場は藪に消えてゆき下りの列車がホームに入る

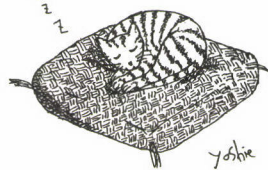
れなかつたようだ。そんなとき、以前申込みをしたM施設から問合せが私のもとにきた。Tさん

言うTさんに、私は「よく決心されましたね」と思わず肩を抱いた。鶏頭の赤い滴がしたたれる秋雨の中に人を見送る

# いい病院はどこに在る

YOSHIE

## ⑧諦めない治療を求めて



私は諦めない治療を求めてここまでやってきた。上の娘が18歳、下はまだ10歳の小学生だ。今しばらく、彼女たちの成長を見守りたいと願うのは当然だろう。

## 娘たちの成長を見守りたい

のリストを持つている。それは、欧米では有効とされているが、日本では卵巣がんの薬として認可されていない種類のものだ。試してみる価値のある薬だが、それを使うには医療制度の大きな壁が立ち上がった。

常へと戻っていったのかもしれない。ところが、私の「がん」は再発を繰り返してしまつた。その上転移もしている。こういう経験をしなから治療を続けていると、患者の状況変化に対応しきれない医療現場の現実が見えてくる。

勤務医として病院組織の中にいるというのは、一定の規則や制度に添って仕事をしているのだ。私や私の家族が考える私の命と、医療者が考える多くの患者の中のひとりとしての私の命の重大さは、明らかに違つた。ましてや、医学に限界があることを医療者は知っている。

厚いケアを最も必要とするのは、やはり終末期だ。治療優先の一般病棟に緩和ケアのスキルはない。勿論そこに働く医療者は皆、精一杯やっている。しかし、患者に対するスタンスがそもそも違つた。そのことを、患者は知らなくてはならない。

## 私らしさの第2ステージ 更年期



美代子の  
更年期

河野美代子  
(産婦人科医)

中村さんが新聞記者を辞めたことは残念ではあつても、家族社を創立し月刊家族を創刊し、全国に配信していったことの意味は、もう私が述べたまでもないだろう。

私には、中村さんをはじめ数々の先輩たちが書かれる文章を読む度に、うなづいた。筆は鋭く、ユーモアや悲しみを含み、一見毒舌であつても我々に対しては限りなく優しい。

## 先輩たちの 知的財産を大切に

### 知的財産を大切に

目いっぱい私たちが啓発し続けて欲しい。私は、少しでも近づけるように吸収し続けたいと思つて来た。

だから月刊家族の終わりは心から残念で、力が抜けてしまった。でもなあ、中村さんの財産的財産ではなく、本当のお金を食いつぶしてし

私も含めて、どこでこれまでの生活の終止符を打つかは課題である。諦めなければと思いつつも、これまでの情性で漫然と生活が続いているのが現状で、だから、今回の月刊家族の終了宣言には、頭を打たれたようにショックを受けました。私も深くしなけれ

ばなあ、とあらためて考えさせられた。これまで紙面に書かせていただいていた感謝している。自由に書かせていただくことで、あくまでも私の責任なのに、批判が家族社に来て迷惑をかけた。ほぼ10年、まさに「更年期」の始まりから終わりを書かせていただいた。思わぬ病気でステロイドを

でも、一番つらいのは、社会全体に巧妙になされているジェンダーフリーへの攻撃だ。これは、しっかりと目を開いて見なければならぬ。行動もしなければならぬ。月家族という基盤がなくなつてしまつたら、でも、これまでのネットワー

## アート散歩

森留美  
一九四八年、岐阜生まれ、東京芸術大学油絵科卒、現在、広島芸術専門学校他講師

なにげなくなんでもないので、何か気にかかると、記憶に残る絵というのがある。この絵もその一つ。絵のなかに後ろ向き

向きの自画像なんて、今までの絵画ではまず見当たらない。男性画家の自画像は、だいたい鏡の前で斜に構えた、かなりヒロイックな自己愛にみちま

な絵を描いたのだらうという疑問が湧いてくる。作者はガブリエーレ・ムンター。かの有名な抽象絵画の創始者、ワシリー・カン

「第三帝国」が成立すると、反ナチ、反ファシズムのすべての政党、団体、思想、個人、宗教に弾圧が加えられた。社会批判をする芸術家ははじめ進歩的とみられる人も職を追われ、

そうした閉塞した時代の空気のなかでこの絵は描かれた。この絵の謎と同時に、この絵のもつリアルティが伝わってきた。暴力的な時代を彼女が描くことによつて、それに抗



『鳥の朝食』  
ガブリエーレ・ムンター (1877~1962/ドイツ)  
閉塞した時代と日常 48

それに對して、とても絵にならな

罪されたために、彼女はナチの時代にはかなり制限された生活を強いられていた(ワシントン女性芸術美術館展カタログ)とあるように、1933年、ヒトラーが政権を握り

は、居間にはアドルフ・ツィングラ(ギリシャ神話などに仮託して俗悪すれすれのヌードを描いたことから「恥毛の巨匠」の異名をとった四大巨匠が掛けられていた。クレイ、カンディンスキーらの抽象派や、社会批判のグ

描くことによつて、それに抗してきたのだということが分かる。



# 田端の現代韓国女性

かや

1995年から始まったこの連載だが、いつも友だちに手紙を書くような気持ちでそのとき気分に応じて書きたいことを書かせてもらってきた。あらためて家族と読者の皆さんに感謝の気持ちを伝えたい。

最後の原稿をかまえるとき、何だかとても緊張してしまう。1995年から始まったこの連載だが、いつも友だちに手紙を書くような気持ちでそのとき気分に応じて書きたいことを書かせてもらってきた。あらためて家族と読者の皆さんに感謝の気持ちを伝えたい。

「韓国女性事情」はこの10年で大きく変化したようにも感じるし、何も変わっていないようにも感じる。わたしと韓国社会、韓国女性との距離感がずいぶん縮まったことは、はつきり感じ取れるけれど、日韓外交では2005年が修交40周年にあたるため、記念行事がいろいろあるらしいが、韓国では「光復(クワンボク)60年」という言葉もよく耳にする。そう、日本からの植民地支配解放60年。

思い返せば、この連載を始めた95年は「光復50年」で日本軍慰安婦の問題が日韓で注目され、このコーナーが縁となってジョン・ヨンジュ監督と日本へ行った。日本から

依然として存在する戦争での女性人権の蹂躪、犯罪問題の解決のための学習の場をつく



「バレエ教室」のポスター。若者が集まる街やカフェ、ファストフード店などに貼られているのを見かけた。

## ジョン監督の新作「バレエ教室」韓流ブームの中で

「バレエ教室」のポスター。若者が集まる街やカフェ、ファストフード店などに貼られているのを見かけた。

「バレエ教室」のポスター。若者が集まる街やカフェ、ファストフード店などに貼られているのを見かけた。

# 公共空間

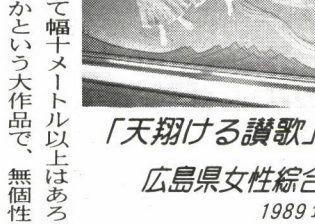
西山千恵子(非常勤講師)

「公共空間とジェンダー」と題するこの連載、第1回目の原稿を読み直すと、「女性センター」や「公共施設」を主に視覚の面から点検しようとするなど書いている。当初は公共彫刻に限らず、公共空間のジェンダー問題を幅広く

取り上げようという意気込みであったのだ。たとえば、公共輸送機関である電車内の吊広告等によるポルノ化の問題、自治体のまちづくりへの女性の参加、市営、県営運動場の男女の使用率の比較、学校の休み時間の

この月刊家族は今回の号をもって、その栄えある歴史に終止符を打つというではないか。家族社の方たちこそ、いっそう複雑な胸のうちであろうと察せられる。とにかく、この連載も、今回で

女性センターのジェンダー構成に關心を



「天翔ける讃歌」奥田小由女作 広島県女性総合センター 1989年

その建物の1階入り口、ロビーのところで、一瞬にして私の目をひいたのが、壁一面に大きく飾られたレリーフ上の壁画だった(写真)。全体的

な色調としてはブルーの背景にピンクが目立ち、その画面には幾人もの若い女性と、少女が空中を飛んでいる。

この画一的な女性群像の作品が、広島県女性総合センターの設置目的にどのような整合性をもつて、飾られているのだろう。おそらく、整合性などについては無節操に考えもせず、そしてかなりの予算を使ってこの作品を設置したのだからと推測される。もちろん、お役所仕事としては、どうでもリクツをつけて設置の正当性を主張するのであろう。

### ツガイとつエ

北原みのり

ラピススクラブ代表 エッセイスト

それでも男とセックスするか

ベルリンを旅した時、思いつきで車を借りてプラハまで走ってみた。アウトバーンで思い切りスピードを出してみても、車で国境を越えるというのも初めてのことで、わくわくした。

度ではない。色んな国で運転をしているのだけれど、こんな意地の悪い道路社会は初めてであった。「迷惑をかける」という感情をむき出しに、車の中から攻撃的に迫る人々。

## ますます嫌いになっていく 日本II国家II男

と、書きながら「初めて」というのはウソであると思う。チエコの車文化を味わいながら感じたのは、実は「懐かしさ」であった。「同じじゃーん」であった。日本でよく感じる、お互いがお互いを監視し、少しでもルールからはず

皮肉にも、この作品の正面には、結婚式の貸衣装屋があつて、そこにはこれまた華やかな色あいのロングドレスがいくつも吊り下げられている。むしろ、この女性センターの「公共芸術作品」は、こちらの結婚式の貸衣装屋の光景にマッチするかのようだ。

開してきた保守系雑誌が、立つ場所にこれみよがしに置かれていた状況なのである。女性センターにまで押し寄せた、このようなバックラッシュのヒステリー現象は、一時的なものなのかもしれない。また、あるいは、逆に女性センターが男女差別推進の拠点空間として、名実ともにその勢力に